

# オープンダイアログの理論的基礎

## —ヤクビンスキー、バフチン、ヴィゴツキーからの照明—

神谷栄司

小論は極めてユニークな精神療法の思想であるオープンダイアログの理論的基礎を考察しようとした。このダイアログを開発してきたフィンランドの精神科医ヤーコ・セイックラらによれば、理論的基礎はバフチン理論とヴィゴツキー理論にある。この2つの理論の故に、精神療法の思想であるものが同時に哲学的その他の対話の思想ともなるところに、このダイアログのユニークさが認められる。たとえば、バフチンの「第2の内的な声」は、他者の声に出自を持ちながらも（「特殊な代用品」、自己のなかでの内的対話の相手となる。この対話構造は、自他の関係にセンシティブな精神の変調に苦しむ人の治療的対話のみならず、あらゆる種類の対話にも貫かれている。キーワードに示した諸概念、その他の検討した諸概念も同様である。そのなかで、対話の非完結性こそもっとも本質的なものであらう。対話を何かの手段とすることから訣別するからである。

キーワード：対話主義、ポリフォニー、非完結性、発達最近接領域、内言

This paper has an aim to study the theoretical bases of Open Dialogue, which is a theory of mental healing. The theories of Bakhtin and Vygotsky are laid on the dialogical bases, as Yaako Seikkura, the Finnish psychiatrist, developing this dialogue, said so. Because of two theories, this dialogical idea becomes just not only psychiatric, but philosophical and so on, that is the unique point of Open dialogue. For example, “the second inner voice [Второй внутренний голос]” inside each person, written by Bakhtin, has an origin of other persons (a specific substitution of real other voice [специфический суррогат реального чужого голоса]) and simultaneously becomes an opponent or partner of inner dialogue. This dialogical structure is observed not only in the psychiatric dialogue with sensitive persons to relationship among them and others, but in every kind of dialogue. The concepts, shown by Key Words, and the other, studied in this paper, are also contained in the same structure. Among these concepts the most essential one is “uncertainty [незавершимость]”, which means a farewell to dialogue as a tool. Because here dialogue becomes a goal itself.

Key words : Dialogism, Polyphony, Uncertainty, Zone of Proximal Development, Inner Speech

### 1 対話における「オープン」の意味

オープンダイアログに含意される普遍的な対話の原理

小論が対象にするオープンダイアログは、わが国でも注目されつつある精神療法の考え方・思想であり、その意味では、特定の治療的対話を意味している。

より具体的に述べることにしよう。このダイア

ログの主要な紹介者のひとり、精神科医でもある斎藤環によれば（斎藤、2015）、オープンダイアログとは、ヤーコ・セイックラらがフィンランド西ラップランド地方（ケロプダス病院）で開発した集団的対話にもとづく精神療法の考え方・思想である。服薬が常套手段となっている「自分と他者の境界があいまいになる病気」である統合失調症（斎藤、2015、p.13）にも効果が上がっており、また「うつ、引きこもり、不登校」にも効用が示され

ている。上記の斎藤の著作（斎藤編、2015）には、DV、街頭での暴行による精神の変調の事例を考察したセイックラらの論文も翻訳されている<sup>1)</sup>。

このように書くと、オープンダイアログはもっぱら精神の変調にかかわる領域に固有なものだと捉えられかねないし、事実、直接的には、そのように捉えて間違いはない。だが、本質的に把握してみると、このダイアログは精神療法の領域を超えて、様々な領域の対話に通用する考え方を秘めている<sup>2)</sup>。

### 精神療法における「オープン」の意味

まず精神療法の領域においてオープンダイアログが持つ「オープン」の意味から始めてみよう。

オープンダイアログを精神療法の技法として捉えた場合には、斎藤環の紹介するところによれば（斎藤、2015）、「オープン」の意味は次のように浮かび上がってくる。

①精神科医やカウンセラーと患者（クライアント）との1対1の関係（これはモノログの関係と呼ばれている）からの解放。患者本人、家族、医療チームのミーティングによる対話。発症初期から急性期を脱するまでの期間、そのようなミーティングが毎日積み重ねられる。これがオープンダイアログのもっとも分かりやすい特徴であろう。

②「専門家が指示し患者が従う」という関係からの解放。しかし専門性が否定されるわけではなく、医療チームによるリフレクティング〔展開されてきた対話の内容をどう捉えるかという話し合い〕が患者本人や家族の前でなされる。医療チームだけでいかなる決定もせず、ミーティングを通して次にすることが決められる。

③服薬と入院からの解放。ミーティングにおける対話で良い結果を得られないときにのみ、服薬や入院が行われる（良い結果が得られないときの「保険」）。

④傾聴と応答のなかでの自由な発話。そのなかで「対話を支える振る舞い」「感情の分かち合い」「コミュニティの形成」そして「新たな共有言語〔意味〕」の創造が実現される（セイックラ、トリムブル、p.149）。

これらの特徴が示唆する精神療法の技法は、オープンダイアログ以前の技法から引き継いだものでもある。すなわち、カウンセラー・精神科医と当事者との1対1の関係のなかでの治療ではなく、当事者とその家族という「集団」が主体となる「家族療法」、当事者の語る物語を重視しつつその意味の変容を促す「ナラティブ・アプローチ」、常時ではないが当事者やその家族の前で行われる専門家同士の考察的討論としての「リフレクティング」などである。

### 内包されるバフチン理論

上述した領域の超え方は、「オープン」についてのシンプルな加工によって可能になる。その大前提には、精神疾患の有無、障害の有無にかかわらず、人間発達は本質的には同じ筋道を辿るということがあり、ヴィゴツキーの考えによれば、統合失調症は自己意識形成期の神経学的に典型的な発達（neurologically typical development, NTD）を理解する鍵となる、ということがある<sup>3)</sup>。それよりはるかに容易であるが、オープンダイアログを理解するにはバフチンの理解がいる。とくに、バフチンがドストエフスキーの小説と芸術論とを分析しようとした観点、すなわち自己意識と対話との関係を理解することが必要である。このダイアログを唱えはじめたセイックラは自己のバフチンへの関心を示すような逸話を紹介している。斎藤環はセイックラから直接に聞いた話として次のように書いている（斎藤、2015、p.29）。

オープンダイアログのアイディアに煮詰まっていたとき、奥さんから〔学生時代に読んだ—神谷〕「バフチンのことは忘れたの?」と指摘されて、ああそうだったと再読し、あらためてオープンダイアログとの親和性に気付かされた……。

いうまでもなくバフチンの диалогизм（ディアロギズム、dialogism、対話主義またはダイアログの思想）は、ドストエフスキーの小説の分析から得られた概念であり<sup>4)</sup>、言語論と文学論から現実の問題に迫ることのできる概念でもある。それ故に、もともと精神療法に特化された概念ではなく、精

神療法をも含めて多方面に拡がっていく概念であろう。それだけ、ドストエフスキーの人間観察と表現との深さ、バフチンの分析の鋭さを示している。これ以上のバフチンそのものの考察は後に行うことにしたいが、ここでは、こうした幹から伸びてきた枝の1つがオープンダイアログなのであるから、他の枝に容易に移ることができること、幹の核心の1つは対話参加者たちの意識の「同権性」にあること、とだけ述べておこう。

### オープンダイアログのわが国への紹介と理論的課題

わが国におけるオープンダイアログの主たる紹介者は、上記の斎藤環、および、高木俊介のふたりの精神科医療の研究者である。それぞれが刊行した翻訳を含む著書の目次を示した上で、彼らの問題意識について若干考察しておこう。

斎藤環（編集・翻訳・著述）オープンダイアログとは何か（2015、医学書院）

#### 第1部 オープンダイアログとは何か（解説、斎藤環）

- 1 オープンダイアログの概略
- 2 オープンダイアログの理論
- 3 オープンダイアログの臨床
- 4 オープンダイアログとその周辺
- 5 本書に収録した論文について

#### 第2部 オープンダイアログの実際

- 1 セイックラ、オルソン：精神病急性期へのオープンダイアログによるアプローチ——その詩学とミクロポリティクス（2003）
- 2 セイックラ：精神病的な危機においてオープンダイアログの成否を分けるもの——家庭内暴力の事例から（2002）
- 3 セイックラ、トリムブル：治療的な会話においては、何が癒す要素となるのだろうか——愛を体現するものとしての対話（2005）

高木俊介、岡田愛（翻訳）オープンダイアログ [セイックラ、アーンキルの著書の原題は *Dialogical meetings in social networks*, 2006]（2016、日本評論社）

イントロダクション——ネットワークとダイアログについて

- 第1部
  - 第1章 〈対話〉——それは専門家ネットワークとパーソナル・ネットワークのあいだ、あるいはそれぞれの内の境界に生まれる
  - 第2章 ネットワーク・ミーティングを阻むもの
- 第2部
  - 第3章 オープンダイアログによる危機介入
  - 第4章 未来を想定して不安をなくす対話法——「未来語りのダイアログ」(Anticipation dialogue)
  - 第5章 2つの対話、その異同、そして対話性について
  - 第6章 〈対話〉はどのようにして苦悩を癒すのか
- 第3部
  - 第7章 〈対話〉について、そして応答の技法
  - 第8章 〈対話〉を用いたネットワーク・ミーティングの有効性
  - 第9章 さらに研究と実践へ  
エピローグ——エンパワメントに向けて  
高木俊介：訳者あとがき

斎藤の著作の特色は、オープンダイアログについての自らの解説に重きをおき、その根拠となるセイックラらの3つの論文を編集したところにある。「理論的基礎」の観点からすると、第2部の1でバフチンの対話主義が明らかにされ、3ではヴィゴツキーを中心とする発達心理学——とくに発達の最近接領域や内言——も扱われている。このように発達心理学理論が位置づけられていることが、高木の著作にはない特色である<sup>5)</sup>。

他方では、高木の著作は、オープンダイアログはそれ自体としてではなく社会的ネットワークのなかで捉えるべきであることを徹底して、オープンダイアログとともに、「未来語りのダイアログ anticipation dialogue」をも取り上げている。これらの2つのダイアログは共通性が多くあるものの、それぞれに固有なものも少なくない。たとえば、オープンダイアログは発症後の急性期に効力を発揮し、対話参加者たちの「いま、ここでの」心的体験などが語り合われる。それに対して、未来語りのダイアログでは、発症後、ある程度の時間が経ち、治療の方向がうまく見えない時に主としてネットワーク間の対話として行われ、たとえば2年後の予想される（こうあってほしいとい

う) 姿をもとに語り合われる。そのように、オープンダイアローグを単独に捉えられる技法ではなく、ネットワークのなかにおいて捉えられるべきだ、ということが浮かび上がってくる。

小論では、このような傾向を念頭におきながら、次のように問題を考察したい。

①オープンダイアローグの理論的基礎には、その提唱者が述べるように、バフチン理論とヴィゴツキー理論とがある。小論では、バフチンもヴィゴツキーもともに言語学者ヤクビンスキーの「対話のことばについて」から直接に引用することも含めて学んでいると考えられるので、この言語学者の論文を考察することから始めたい。とくに彼の「形式」の分析の重要性にもかかわらず、彼の理論における「概念」の不足を論じている。

②オープンダイアローグの理論的基礎の大部分はバフチンから採られている。バフチンのドストエフスキー論から引き出されるもの、とくに、《作者と作中人物との関係》から引き出される意識の同権性、ドストエフスキーが描いた《対話》から引き出される自己意識の対話化、内的対話、その中核にある自己の第2の声との外的対話、ポリフォニー小説の源泉の1つであるカーニバル論という《ジャンル》のなか位置づけられるソクラテスの対話（この考察もまた治療的対話の領域を超えていくことを助けるであろう）、などを分析することが不可欠であろう<sup>6)</sup>。

③ヴィゴツキーについては、オープンダイアローグは「発達の最近接領域」と「内言」との概念を採り入れている。その採り入れ方も正当なものである。ただ、やや物足りない点は、内言が情動との関係だけに限定的に捉えられているために、対話が必然的に含む「思惟から語への」また「内言から外言への」運動が十分に考察されていないこと、ヴィゴツキーの統合失調症に対する見解（概念的思考の「崩壊」）が取り上げられ位置づけられていないこと、である。そのうち、後者は小論の考察の課題とした<sup>7)</sup>。

④この課題の一部にあたるが、ヴィゴツキーにはポストモダニズムとモダニズムの「対立」を乗り越えていくテーゼがあるように思われる。それは、ディルタイと生理学的情動理論との相対立する情

動理論に対して、ヴィゴツキーが「記述と説明との統一」を提唱していることである。斎藤も高木もセイツクラも、概ね、オープンダイアローグを（そしてバフチンをも）ポストモダニズムの文脈において捉えようとしているし、治療的対話の範囲内ではそれは有効な位置づけであろう（ただしセイツクラとトリムブルはヴィゴツキーと発達心理学を摂取するためにモダニズムが必要であることに気づいている）。オープンダイアローグが治療的対話の領域を超えていくための、もっとも深部にある理論的課題とはポストモダニズムとモダニズムの問題であろう<sup>8)</sup>。

## II ヤクビンスキーの対話論——形式的分類の徹底

### ことばの多様性と形式的分類

ヤクビンスキーはやはり言語学者である。その上で、「対話のことばについて」という論文では、対話をめぐる心理言語学的研究をおこなっている。

彼の論文がことばの多様性を対象とし、それを形式的に分類することから始め、必要に応じて、アリストテレスなどの古代ギリシャにおける言語学説、フンボルト、青年文法学派に言及しつつ、人間の交通および対話（および独話）の形式的分類を徹底的に行っていることに、彼が言語学者であることがよく現れている（第I章、第II章）。

そのなかで、ことばの多様性は、「個々の言語 язык・地域方言 наречие・土地の言葉 говор、さらに個々の社会グループの方言 диалект に至るほどの、最後には、個人的方言 индивидуальный диалект という、数え切れない多数のものの存在におけるだけではない」のであって、その「多様性は、その言語 язык・土地のことば говор・地域方言 наречие の内部にも（その個人的方言 диалект の内部にさえ）存在している」（第1節、ヤクビンスキー、1923/2019、p.2）のであり、そのような多様性は、「人間のことがその関数であるところの、諸要因の複雑な多様性によって規定されている」（同上）のである。このようなことばの多様性を対象にするところに、言語学の特徴の1つがある。

ヤクビンスキーはそれに加えて、まだ当時の言

語学が扱っていないような多様性にも言及している。上述のことばの多様性を惹き起こす諸要因を心理学的(生物学的)次元の要因と社会学的次元の要因とに分けた(概ね前者の要因は個人内の要因、後者の要因は個人間の要因とした)。そのうえで、

心理学的(生物学的)次元の要因:「一方では、ノーマルなオルガニズムの状態と病理学的で非ノーマルなオルガニズムの状態とにおけることばの区別、他方では、情動的モメントあるいは知的モメントの優勢な影響のもとにあることばの区別」(第3節、p.3)とし、

社会学的次元の要因:「第1に、注目しなければならないのは、習慣的環境(あるいは諸環境)における交通の条件と非習慣的環境……との相互作用の条件とである。第2に、交通の諸形式—直接的形式と間接的形式、一方向的形式と交替的〔相互的〕形式……である。第3に、交通(と発話)の目的—実用的目的と芸術的目的、無差別な目的と確信的(説得的)な目的」(第4節、p.4-5)とした。

これらの要因の最後に示された「交通と目的」に関しては、歴史的には、ことばの機能の区別(ことばの機能的多様性)として、ウィルヘルム・フォン・フンボルトにおける詩的言語と散文的言語との区別から始まったが、帝政ロシア期の言語学者ポテブニャも同じような区別を行い、そこにとどまった。この問題を継承しながら、ヤクビンスキーの強調した新しい点は、ことばの機能的多様性を目的の観点(言語外の観点)による多様性と捉えたこと、ことばの形式の分析を目的的分析よりも先行させねばならないこと、を主張したことであった(第12節と第13節を参照)。この考えの評価については、後述したい。

### 人間の交通(交わり)の諸形式

ヤクビンスキーによる人間の交通(交わり)やことばの分析の特徴は、上述したように、ことばの形式的分類を徹底することであったが、同時に、そのように分類しきれない中間的形式などの現実の複雑性をいささかも軽視していないことである。むしろ、形式的分類の意味は、その分類をすり抜けるものをあぶり出し、それを考察することにある

ほどであった。

対話論に深く関わるものである、上述の社会学的次元の要因の第2について、ヤクビンスキーは、人間の交通(交わり)の直接的形式と間接的形式との区別、発話についての対話(ダイアログ)形式と独話(モノログ)形式との区別、ことばの口頭的形式と書記的形式との区別、という3種類のことば内部の分類を施している。——「人間の相互作用の直接的形式(フェイス・トゥ・フェイス)に照応するものとしては、発話する顔の(視覚・聴覚の面での)直接知覚と特徴づけられる・ことばの相互作用の・直接的形式が存在する。間接的相互作用に照応するものとしては、ことばの領域では、たとえば発話の書記的形式が存在する。

相互作用する諸個人の作用と反作用の相対的に速い交替を暗示する・相互作用の・混合的形式に照応するものとして、ことばの交通の対話形式が存在する。交通における作用の長い形式に照応するものとしては、ことばの発話の独話的形式が存在する」(同上、第2章・第14節、p.18)。

もしこれらの3種類の区別を連関づけるなら、典型的な事例としてあげられるのは、

- ①交通の直接的形式—対話的形式—口頭的形式
  - ②交通の間接的形式—独話的形式—書記的形式
- となるであろう。それに加えて、それぞれが産み出すものは、①が「ことばの自動化」、②が「新しい語の創造」にそれぞれ照応する。

だが、ここで分析を止めないのが、ヤクビンスキーの考察の魅力である。彼は①②の連関よりもっと多様な連関があることを見逃していない。しかも、「直接的相互作用のもとでは、もちろん、対話的形式も独話的形式も可能となるが、こうした事例においてこそ、それらの比較研究がもっとも好都合になりうる」(第14節、p.18-19)と述べて、典型的な連関より以上に、中間的な形式から、本質により近づきうることを指摘する。たとえば、

——「発話の対話的あるいは独話的形式と直接的・間接的形式とのありとあらゆる結びつきのうちで、社会的により意義があり、十分に広く普及しているのは、次の3つの結びつきである。〔すなわち〕対話形式と直接形式との結びつき、独話形式と直接形式との結びつき、さらには、独話形式と

間接形式、より正確には書記的形式（文字の他に、ことばの他の『仲介者』をも思い描くことができる）との結びつきである」（同上、第16節、p.20）。

ここで指摘されている「結びつき」のうち、「独話形式と直接的形式との結びつき」の実際場面は、かなり複雑なものであろう。ヤクビンスキーが挙げている諸事例のうちで、それに該当するものは、集会における報告者と聴衆との関係である。報告者はあらかじめ準備した内容にそって息の長い発話をするのであるから、その発話は独話形式のことばである。それと同時に、聴衆の視点からすれば、報告者の顔や声から、ことばと癒着した表情・身ぶり・イントネーションを感知し、そのことばが理解しやすくなる、という点において、直接形式の交通がそこにはある。だが、これは、視点をかえれば、聴衆は報告者に対して応答する形で耳を傾け、「この応答性は、報告を聞くことに伴う内言において表現されている」（同上、第27節、p.32）のであるから、この独話形式のことばは同時に対話形式のことばでもある。

#### 応答性について

言いかえれば、この事例の意味は、聴衆の視覚および話し手のことばの観点からすれば「独話形式と直接的形式」の連関であるが、聴衆の聴覚が惹き起こす内面的変化の観点からすれば、「対話形式と直接的形式」の連関でもある。

この事例において、対話形式を独話形式から区別するものは、聞き手の「応答性」であろう。たとえば、集会や法廷でのことば、演劇のことばに対して、聴衆は沈黙しているように見えるが、彼は「内言」によって応答している。「その通り」という肯定、「いや違う」という否定、「そう言い得るかどうか後で考えてみよう」という思索への誘いなどが、それぞれの聞き手各人のなかで語られる。ヤクビンスキーは、おそらく音を伴わないことばという意味で、この場合の応答を《内言》としているように思われ、また内的対話の1コマとすべきものだが、ヴィゴツキーのいう《内言の担う高次心理諸機能》までは意味していない<sup>9)</sup>。

ヤクビンスキーの場合、ことばの傾聴や応答によって生じる人間の内的過程を近似的に表わすこ

とばの形式を取ってあげるとすれば、ことば（あるいは発話）の書記的形式であろう。

#### 発話の書記的形式

ヤクビンスキーの使用する、発話の書記的形式 *письменная форма высказывания*（第14節、p.18）という表現は、音声のなかに使用される文字というようにも解することができるので、やや矛盾をはらんでいる。彼が捉える発話の書記的形式の本性、とりわけ、人間の交通（交わり）における直接的と間接的との形式、対話と独話との形式との関連での本性、を明るみに出しておく必要がある。

ヤクビンスキーは言語学者らしく、まずことばの事実から出発する。人間の交通における書記的形式（交通のための文字その他の媒介物）は間接的形式と結びつき、通例は独話形式と結びついている。そして、再び言語学者らしく通例から逸れて、対話形式と結びつくような事例を指摘する。

対話形式のなかでも相手の顔が見えないという点でやや特殊な、暗闇のなかでの交通、電話による交通、閉められた戸や壁を通した交通などの対話的交通がある（第14節、p.18）。対話のなかでも書記的形式が具体的に使用される特別な事例としては、「書きつけ」（たとえば会議のなかでの）による対話的交通がある。また、電信による対話も指摘されている（第14節、p.18）<sup>10)</sup>。

応答性や対話性ととともに、ことばの書記的形式においても、集会の事例はユニークである。集会におけることばの相互作用を考察してみると、報告者への聴衆の応答性は上述したように「内言」（正確には端緒的な内言）に現れている。さらに、報告者の独話的発話に並行して、『聞き手たち』の生きいきとした対話、ささやきとか『メモ書き』による対話<sup>11)</sup>が産み出される。「聞くことはしばしば紙への様々な覚書に定着される」（第27節 p.32）。ここでは、書記的なことば——書記的な対話を含む——はけっして例外とは言えない。他者の独話（独話的報告）を傾聴すること・深く聞くこと、さらには、書記的独話をその人と対話するかのように深く読むことは、様々な形の書記的形式のことばとつながっている。

ヤクビンスキーは本や論文を読むことについて

次のように書いている。「興味深いことには、書記的独話（本、論文）の知覚さえ、ときには思考の上での、ときには声を出しての、ときには書くことよっての——線を引く・余白に書き込む・紙を挟み込むなど、という形での——、割り込みと応答化をよび起こす」（第28節、p.33）。言いかえれば、思考の上での「割り込みと応答化」（つまり対話化）、声を出しての対話化、広い意味での書くことによる対話化は、深く関連しあっている。

以上は、《聞くこと》や《読むこと》との関連での聞き手（読み手）の書記的言語の特質であり、それは、要するに、聞くことや読むことが惹き起こすものは対話的（外的・内的）ことばである、と結論づけられる。

### 顔の知覚とことばの知覚

人間の交通（交わり）の中心にはことばがあるが、同時に言えることは、それはことばだけではない、ということでもある。とくに「フェイス・トゥ・フェイス」という語が示しているような、直接的交通と対話の条件においては、発話は口や喉によるのみならず顔全体によってもなされる。相手の話を理解するためには、相手のことばを理解する必要があるが、現実には、発話する顔が中心となる「表情・身ぶり・イントネーション」からも相手の話を理解している。その典型的事例は2人きりの対話であろう。ヤクビンスキーは対話するときお互いを見ることは「本能的志向」である、とさえ述べている。筆者は、これを対話における《顔の知覚》と呼びたいと思う<sup>11)</sup>。したがって、《顔の知覚》と《ことばの知覚》が融合した状態にあるのが直接的交通性・対話・口頭的形式のことばの特徴である。それは少々、語が脱落しても、相手に理解しやすいものとなる。

他方、間接交通性と独話、それに特有な書記形式のことばは、上記の事例における融合物から《顔の知覚》を取り除き、残った《ことばの知覚》を意識化し、語と語の連結を法則化し、いまここにいない人にもよく理解できるように詳細化する。そこに生じるものの典型あるいは極限は、「ことばの『創造』」（第57節、p.70）である。ただし、これには多少の註解がいる。

ヤクビンスキーは第57節において、言語の大量の変化、すなわち、ことばの可変性・ことばの「創造」は対話において生まれると仮定した場合、そこで考えられるのは2つの可能性である、とする。①それらが「意識的形式」において生まれるとするなら、対話を「複雑で・習慣的でない・言語活動」と結びつけることになる。②これらは「自動的な対話的ことば」において現れることになる。これらの可能性のうち、①の可能性は実際には存在しない。その理由は2つあり、1つは、実際には言語的变化（ことばの可変性・ことばの「創造」）は意識的形式から独立して生じるからであり、2つには、言語的变化が仮に意識的形式と結びついた対話のもとで生じるとすれば、「ことばの独話形式と書記形式」とにおける方が、対話形式におけるよりも、遥かに大きく生起するはずだからだ、という理由からである。

ヤクビンスキーが述べたことのうち、第1の理由における言語的变化と、第2の理由における言語的变化とは、同じ意味内容だとは思われない。第1の方は、外に現れた（外言の）形相・意味の変化を表し（甚だしくは「新語の創造」）、第2の方は、外言であるよりは、内側のことば（内言）の意味の変化を表しているであろう。ところが、ヤクビンスキーの対話理論には外言・内言の区別がないので（内言は内的応答という意味のみである）、2つの理由が述べられた条件において、言語的变化は同じ意味ではなく区別がある、ということが不分明なのである。この点を除けば、概ねは肯定できるものである<sup>12)</sup>。

なお、上述のことと少々重なるが、この対話形式と直接交通性、独話形式と間接交通性の各組み合わせについて、《ことばによる判断指標》《心理過程》《帰結》の観点から、ヤクビンスキーの述べる属性を手繰り寄せれば、次のようになるであろう。

直接交通性と対話形式とから生じる特殊性（第1の特殊性）：交通における作用と反作用との交替の素早さが眼に見える特徴である。その場合の心理過程としては、会話の際にことばと癒着して現れる「話し相手への視覚と聴覚」、すなわち、表情・身ぶり・イントネーションなどの知覚であり（第17節、p.20）、これらが相手の話の理解を容易にす

る。これらが生み出すものは、「ことばの自動化」(第57節、p.70)である。筆者はこれらの特殊性を《話しことば(口頭形式のことば)の特殊性》と言い換えたい。

間接交通性と独話形式とから生じる特殊性(第2の特殊性):発話における長さが、感覚できる特徴である。そこに含まれる心理過程としては、「複雑な活動の次元におけることばの過程」(第34節、p.38-39)、より具体的には、「複雑な意志的行為、つまり、考え直し・諸動機の闘争・選択などを伴う意志的行為の次元」(第30節、p.35)の過程を示している。そこで起こるものは、「ことばの『創造』」(第57節、p.70)である。ヤクビンスキーも「発話の書記的形式」と述べるように、筆者はこれらの特殊性を《書きことば(書記形式のことば)の特殊性》と呼びたい。

## 2種類の特殊性を併せ持つ治療的対話・哲学的対話

上述したごとく、直接交通性・間接交通性と対話・独話との組み合わせを念頭におき、また集会での報告者と聴衆の関係が示すように、独話形式のことばが同時に対話形式のことばにもなるということをも考慮に入れると、ヤクビンスキー考える対話の概念はかなり広い。それによって上記の直接形式と間接形式との各々の特殊性を対話形式のことばに引き寄せる点で見事に成功している。やや形式的に言えば、第1の特殊性は人間の「本能的志向」(第3章・第19節、p.23)に根ざしているために、あらゆるタイプの対話に共通するものであるが、それに対して、第2の特殊性は「特別な場合」(第5章・第30節、p.35)の対話にのみ現れている。言いかえれば、ヤクビンスキーのいう「特別な場合」の対話のみが、直接交通性と間接交通性とに由来する2種類の特殊性を帯びているのである。

そのような1種類の特殊性か、2種類の特殊性か、という観点からすると、ヤクビンスキーのいう対話(応答)の素早さは前者のみの特徴であり、後者は応答の断絶や沈黙によってより大きく特徴づけられるであろう。それに関連するが、1種類の特殊性は「ことばの自動化」を、2種類の特殊性は意識的な「ことばの『創造』」を産出する。ここに

において、眼に見え耳に聞こえることばの理解しやすさと同時に、複雑な次元の言語過程と「ことばの『創造』」をもたらす2種類の特殊性を併せ持つ対話こそ、治療的対話や哲学的対話を真に特徴づけるものであろう<sup>13)</sup>。

## ことばの機能——フンボルトからヴィゴツキーへの道の途上にいるヤクビンスキー

ヤクビンスキーはこの論文の結びにおいて、彼の研究が不完全でいくぶんは表面的なものであると認識し、その原因は自己のなかにあるのみならず、言語学の状態のなかにもある、と考えている。具体的には、「言語学はことばの機能的多様性の研究をどの範囲においても自己の課題としていない」と述べて、事実資料がまったく不足していることを痛感している(第62節、p.75)。しかし、問題は、事実資料にあるのみならず、主要には、理論的問題にあるのではないか。

ことばの機能の区別は、フンボルトにおける詩的言語と散文的言語との区別から始まったが、ヴィゴツキーにおけるこの機能の区別は、ことばの形式の本質的特徴を抽象する形で、「他者に向けられたことば」としての外言(外的言語)と「自己に向けられたことば」としての内言(内的言語)との区別、つまり、対他的ことばと対自的ことばとの区別という具合に、言語的に純化された。フンボルトも言及しているようだが(ヤクビンスキーによれば)、詩的言語と散文的言語との機能的区別は、より具体的に、「会話の言語、詩的言語、学術的論理的言語、弁論術的言語」(ヤクビンスキー、1923/2019、第1章・第12節、p.17)という目的的分区分へと進化している。だが、その尺度においては言語外的な基準にもとづく区分になっている。ヤクビンスキーは、目的的分区分という「言語外的な領域」から「ことばの現象」に「架橋」するために、また、「ことばの形式」から出発するのであるから、目的的分区分に対して、種々の「伝達手段の相違」(たとえば話しことばと書きことばの相違)と「独話(モノローグ)と対話(ダイアローグ)」の相違とを対置したのである(同上、第1章・第13節、p.17)。この点で、ヤクビンスキーに不足していたのは、外言と内言という概念であった。

まとめて言えば、ことばの機能、言語形式に関する考え方において、ヤクビンスキーはウィルヘルム・フォン・フンボルトからヴィゴツキーへの移行過程に位置するのである。

〔ヤクビンスキーによる形式的整理に学びつつ、また彼には欠けていた外言・内言の概念を用いて、小論が扱う対話とその分類とを補足的に述べておきたい。対話の分類を先取的に言えば、対話はすべて外言を用いてなされるが、そのうち、内言があまり重きをおかれない対話はたんなる「おしゃべり」であり、その特徴は「ことばの自動主義」である。内言が重きをおかれるものには「治療的対話」と「哲学的対話（広義）」があり、内言の使われ方によって「新しいことば・意味」がより新しく創造的に創り出される。「治療的対話」と「哲学的対話（広義）」との違いは「新しいことば・意味」が情に収斂するか知に収斂するかの違いである。〕

### III オープンダイアログにおけるバフチン理解

#### オープンダイアログの理論的基礎とバフチン

まず、オープンダイアログを根底的に支えている理論はバフチンとヴィゴツキーのそれであることを、斎藤環のまとめから、明らかにしておこう。この点について、斎藤は次のように総括的に語っている（斎藤、2015、p.28）。

（セイツクラらが使用している）詩学、対話、ポリフォニーといった用語から予想されるように、オープンダイアログの哲学は、思想家であり文芸理論家でもあるミハイル・バフチン、および心理学者レフ・ヴィゴツキーに大きな影響を受けています。クライアントとのミーティングでは、こうした詩学の原則にもとづいて、治療的対話が生成されることとなります<sup>14)</sup>。

セイツクラら自身が、オープンダイアログを念頭におきつつ、バフチンについて直接・間接に述べていることを、より詳しく見てみよう。

セイツクラらは（セイツクラ、オールソン、2015、pp.93-99）「オープンダイアログの詩学 the Poetics of Open dialogue」およびその

内容としての「不確実性への耐性 Tolerance of uncertainty」「対話主義 Dialogism」「ポリフォニー Polyphony」という諸概念を取り上げ、オープンダイアログを解説している。これらは明らかにバフチンに由来する諸概念、バフチンがドストエフスキーの作品を考察して明るみに出した諸概念である。バフチンにはドストエフスキーを論じた2つの書物——『ドストエフスキーの創作の問題 Проблемы творчества Достоевского』（1929年）と『ドストエフスキーの詩学の問題 Проблемы поэтики Достоевского』（1963年）——があり、さらに前者を後者に改編することを意図した論文「ドストエフスキーに関する著作の改編に寄せて」（1961年）も、バフチンのドストエフスキー論を理解するうえで、重要な文献としてある。セイツクラらは「詩学」という語を「対面して診察をおこなう場面での言葉づかいやコミュニケーションの実践 The term “poetics” refers to the language and communication practices in face-to-face encounters, p.404」という意味で用いているが、上記の3つの主要な内容に着目すれば、この語の出自はバフチンのドストエフスキー論、とくに『ドストエフスキーの詩学の問題』の「詩学」にある。言葉およびコミュニケーション実践としての「詩学」の3つの主要な内容のうち、「対話主義」と「ポリフォニー」との語そのものはバフチンのものであるが、「不確実性への耐性」は、バフチンの用語で言えば、対話の「非完結性 незавершимость」（Бахтин, 1961/1979, c.309）<sup>15)</sup>に照応するものと考えてよいであろう。セイツクラらが言うように、これらの3つのキーワードは、オープンダイアログにおいて相互に繋がっているが、それは同時に、バフチンのドストエフスキー論においてもそうなのである。

#### バフチンのドストエフスキー研究

バフチンは、ドストエフスキーの作品をどのように批評したのか。その方法論的特徴はどのようなものか。その総括的特徴づけは、作品についての「具体的—イデオロギー的 ... 内容 конкретное-идеологическое ... содержание」ではなく、「形式的な内容性 формальная содержательность」を解明す

る、というものであった(1961/1979, c.309)。より具体的に言えば、その作品ならびに作中人物が描写される歴史的社会的なかでどのような意味を持つのか、という批評は、前者のいう作品の具体的—イデオロギー的内容の批評ということになる。後者は、その作品が持つ文学的形式の(ある意味では文学史的な)解明ということであり、例えば、ドストエフスキーの後期の長編小説群はポリフォニー小説である、というのがそれである。

この規定は、新しい人間像を伴っており、バフチンはそれを3つの点にまとめている(1961/1979, c.309)。

①作中人物はけっして作者の手の上にはない。作中人物の意識は、「作者の意識のフレームの内部に立ち現れることはなく、……その外側に立ち並んでいるかのようで」あり、作者は対話的關係において作中人物の意識とともに登場するのである。「作者はプロメテウスのように、自分から独立した生き物を創造(より正確には再創造)し、作者はこの生き物と同権であることが明らかにされる」。「だが」作者はこの生き物を完成させることはできない。なぜなら、「作者は人格〔個人〕ならざる他のすべてのものから人格〔個人〕を区別するものを発見したからである。人格〔個人〕に対して存在は権勢を振るえないのである」。

②人格(個人)から切り離しがたい形での「自己発達する観念の表現(より正確には再創造)」。この観念は芸術的表現の対象となるが、それは「システム(哲学的、科学的)の次元」においてではなく「人間の出来事の次元」においてである。

③「同権で同意義の諸意識のあいだの相互作用の独特な形式としての対話性」である。

以上の3つはドストエフスキーが発見したものであり、より正確には、「これら3つの発見は本質的には1つのものであり、同一の現象の3つの面」であると、バフチンは考えている(1961/1979, c.309)。これらの理論的命題を象形的に表現したものをバフチンから引用するとすれば、『詩学の問題』第1章の書き出しに見事に表されている(『創作の問題』第1章のそれも同様である)。

ドストエフスキーについての膨大な文献を読んできると、次のような印象が作り出される。すなわち、問題となっているのは、長編・中編小説を書いた1人の芸術家としての作者についてではなく、いく人かの思想家としての作者——ラスコーニコフ、ムィシュキン、スタヴローギン、イワン・カラマゾフ、大審問官など——の一連の哲学的発言についてなのだ、と。文学批評の思惟にとって、ドストエフスキーの作品は、その作中人物たちによって主張される・一連の・自主的で・相互に対立する・哲学的諸構成に分解された。それらの構成のあいだで、作者自身の哲学観はけっして前面に押し出されていない。ドストエフスキーの声は、ある研究者たちにとっては、彼のあれこれの作中人物たちの声と溶け合い、他の研究者たちにとっては、すべてのイデオロギー的声たちの独特な総合であり、第3の、最後の、研究者たちにとっては、ドストエフスキーの声はそうした声たちによって聞こえなくなる。……作中人物は、イデオロギー的に権威を持ち自主的であり、彼は自分自身の重みのあるイデオロギー的概念の作者と捉えられるのであって、ドストエフスキーの芸術観を仕上げる客体なのではない。(1963/2002, c.9 //1995, p.13)

この象形的表現は、対話論の観点から、理論的命題へと昇華していくことになる。

#### 作者と作中人物との対話的關係のもつ意味

バフチンのドストエフスキー論の最大の特徴は、ドストエフスキーの作品はポリフォニー(多声的)小説である、という規定である。ポリフォニーの焦点は作者と作中人物との対話主義が作品の根底にある、ということであるが、そうしたバフチンの主張には、深めるべき考え方が込められている。その中心的なものは以下のものであろう。

①作者自身も作中人物も個人として、より正確には、「человек-личность」「人格〔個人〕としての人間」として(Бахтин, М. М. 1961/1979, c.318)、生きていること。バフチンはこれを人間の物象化(概念化)に対置している。

②作中人物は作者の意のままになると思われがちだが、そうではなく、作中人物の独自の生成があること〔「作者はプロメテウスのように、自分から

独立した生き物を創造（より正確には再創造）し、作家はこの生き物と同権であることが明らかにされる」（Бахтин, М. М., 1961/1979, c.309）。

③ドストエフスキーの作品では、作中人物と作者の関係は、「作者による定義を作中人物の自己定義のモメントにすることによって」コペルニクスの転回を遂げている。具体的にはそれはどういうことなのか。バフチンは次のように解答している。——「作者が行なったことを、いまや作中人物が行なっている。それは、作中人物自身がありとあらゆる観点から自己を解明することによってである。作者の方は、もはや作中人物の現実を解明することではなく、作中人物の自己意識を、二次的な次元の現実としての自己意識を解明している」（1963, c.58//1995,p.102）。こうして、作中人物は作者から自立するのである。

④歴史的に見ると、ドストエフスキーは他の作家よりも早く、個人を成立させた社会的変化を捉えた〔「ドストエフスキーが他の誰よりも早く明らかにすることのできた、現実そのものにおける諸変化。」（Бахтин, М. М., 1961/1979, c.309）〕。

なお、上記①②③に深い関連をもつバフチンのドストエフスキーに関する考察のひとつ——「人間像の新しい構造」——には、次のようなことばがある。——「この他者〔作中人物〕の意識は、〔作者の〕内部から明らかにされるわけだが、〔しかし〕作者の意識の縁〔フレーム〕の内部に立ち現れることはなく、〔作者の〕外側に立ち並んでいるかのように現れるのであり、作者が対話的關係においてこの〔作中人物の〕意識とともに登場するのである」（Бахтин, М. М., 1961/1979, c.309）。

言い換えれば、次のようになるであろう。——作中人物は作者の意のままにはならないが、しかし、作者がこういう人物を書こうと思わなければ作中人物は誕生しないのであるから、作中人物の創造にとって作者は決定的な位置にいる。その作者がある意味では「独裁的」〔バフチン的に言えば、モノローグ的〕であるとすれば作中人物は小説のなかで生きられない。作者が「対話的」であって初めて作中人物は生きられるのである。

ここから、小説ではなく現実の対話が問題とな

るときには、小説における作者にあたるような人、つまり、権威が感じられ権力を保有している人の態度が決定的となる。

対話参加者の意識の同権性とは、参加者のあいだでの相互のレスペクトと自由な表現を意味し、そのような対話の成立の鍵は権威・権力のある者にある。これは、オープンダイアログのような治療的対話についても、哲学的対話についても、当てはまることである。

内的対話と外的対話との相互関係——自己意識の対話化など

以上のような意識の同権性は、対話成立のための外的条件なのであるが、それと密接に結びついているのは、バフチンがドストエフスキーの作品の分析から取り出した対話の内的構造である。それには、作中人物の自己意識、内的対話と外的対話の關係、ことばの新しい意味、といったモメントが含まれている。

バフチンはドストエフスキーの人間論・芸術論とともに、とくに対話の具体になればなるほど、ドストエフスキーのドラマトゥルギーを分析して対話構造を解明しようとしているのだが、筆者のこの点での考察では、そのような解明がある程度は抽象化し、現実の対話にも有効であるものを取り出すことにする。

①まず作中人物の自己意識は「対話化」されていること、その自己意識は「自分自身、相手、第3者に対する緊張した呼びかけ」となって現れていること、「人間は呼びかけの主体である」という点からすれば、こうした「呼びかけ」によって最高の意味でのリアリズムである「人間の魂の深奥」、いわば「人間の内なる人間 человек в человеке」を表現しうること、バフチンは明らかにしている（Бахтин, М. М., 1963/2002, c.280 //1995,p.527-528）。対話を構築ないし考察するうえで、その出発点となるのは、対話参加者の「自己意識」なのである。

②その「自己意識」は分裂・二分化において捉えられる。作中人物の「第2の内なる声 второй внутренний голос」（Бахтин, М. М., 1963/2002, c.283

//1995,p.533) という表現が分裂・二分化をよく表している。この場合、分裂・二分化といっても病理的なそれではなくノーマルなそれである。たとえば、ハムレットの有名な台詞を例にとれば、父親殺しの犯人への復讐に関わって語られた、To be, or not to be: that is the question (このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ——小田島雄志訳) の To be が「第1の内なる声」であるとすれば、それとは対立的な(この場合は正反対な) Not to be は「第2の内なる声」である。これによって第1と第2の声による「内的対話 внутренний диалог」つまり「ミクロの対話 микродиалог」(Бахтин, М. М., 1963/2002, c.282 // 1995,p.533) が可能になる。

そうした「第2の内なる声」に種々の関係を持って現れてくるのは他の作中人物の声、つまり他者の外的な声であり、第2の内なる声は、「現実の他者の声の代替物であり、特殊な代用品 замена, специфический суррогат реального чужого голоса」(Бахтин, М. М., 1963/2002, c.283 // 1995,p.533) であった。「説明された作中人物の問題。作者の立場の問題。対話における第三者の問題 Проблема открытого героя. Проблема авторской позиции. Проблема третьего в диалоге。」(Бахтин, М. М., 1961/1979, c.308)。こうして対話の役者は出揃った。

他者の声の「代替物」「特殊な代用品」について、バフチンはドラマトゥルギーの観点からドストエフスキーの諸作品に即して考察しているが、現実の対話を問題にする場合には、対話の基本骨格は共通していても細部は具体的に即して考察する以外にはない。重要なことは、代替物、代用品といっても現実の人間においては第2の内なる声就是他者の声とイコールなのではなく、この内なる声の出自は他者の声である場合が多いとはいえ、内なる声に改変されていく過程がそこにはある、ということであろう。これが、現実において、深みのある対話が成立する基本的な要件の1つである。

1929年「ドストエフスキーの創作の問題」の先駆性、および、ヴィゴツキー、ワロンの自己意識論

上述した、内的対話と外的対話との相互関係、自己意識の対話化の骨格は、1963年の『詩学の問題』

のみならず、ほぼそのまま、1929年の『創作の問題』でも解明されている。バフチンの1929年の著作は、対話の構造論においても、自己意識論においても、きわめて先駆的なものであった。とくに着目すべきは、「第2の内なる声」を位置づける自己意識論およびその声と対話における外部の声との絡み合いという対話論である。

ヴィゴツキーはそれよりもやや遅れて、自己意識を本格的に発達論のなかに位置づけようとしていた。もともと、最初期の論文においても自己意識と他者認識との関係にも言及されている<sup>16)</sup>が、本格的には『少年・少女の児童学』(1931年)において、ヴィゴツキーはより実証的、多面的に少年・少女期の心理研究をおこなっている。だが、その後の「移行期のネガティブな相」(1933年)のなかで、ヴィゴツキーはそれまで十分に解明してこなかった危機的年齢期(この場合は13歳の危機)を発達論のなかに取り入れ、さらには13歳の危機の新形成物として分裂機能を位置づけた。言い換えれば、少年・少女期を切り拓く、いわゆる「13歳の危機」を詳細に考察したのである。それは完成したものではなかったが、そうした考察の要点を次に示しつつ、ヴィゴツキーの立場を明らかにしておこう。

①まずヴィゴツキーは「13歳の危機」に関する諸命題を暫定的な仮説として提起していることである。その理由として挙げられているのは、まだ十分に自分自身の観点を仕上げていないことともに、より本質的には、移行期〔13歳の危機と17歳の危機とのあいだの時期〕と13歳の危機とをめぐり理論の当時の動向・展開の故であった。「少年・少女の分裂的性質 схизотимный характер、つまり、分裂病〔統合失調症〕的気質 схизоидный темперамент と少年・少女の気質とのあいだの類似性、等々」が絶えず指摘されているが、「こうした言説は文献のなかで広範に普及し移行期の理論の基礎に置かれつつも、それが近年では、この主張の効力はネガティブな相〔13歳の危機〕の範囲内だけに限定される」という傾向が生まれつつあった(1933/2001, c.242, // 2012, p.121)。そのこともあって、ヴィゴツキーは自己の言説をまだ仮説であると慎重な態

度をとったのであった。

②ヴィゴツキーは、移行期とそのネガティブな相とを明瞭に区別するという観点から、この時期の問題を取り扱おうとした（1932年の「年齢期の問題」以降）。

子ども・人間の発達を捉えるとき、ヴィゴツキーが強調するのは、それは量的な増大の過程ではなく質的な変化を含んだ過程であることだ。具体的には、一方では、新生児、1歳、3歳、7歳、13歳、17歳の危機という6つの、子どもが不安定で激変する時期、他方では、それらに挟まれた時期——乳児期、幼児前期、就学前期、学齢期、少年・少女期は相対的に安定した時期と考えた。

危機の時期であれ、相対的安定期であれ、それらは同じく「年齢期 возраст」と呼ばれ、それらの区分の基準はどちらにおいてもその時期に初めて姿をあらわす心理学的な「新形成物 новообразование」にあった。もっとも、危機の時期の新形成物と相対的安定期のそれとは性質が異なり、前者の新形成物はそのままの形では次の相対的安定期に引き継がれず、大幅に形を変えるか、潜在するか、である（成層的な形成に近い）。相対的安定期の新形成物は次の安定期に引き継がれていくが、他の諸形成物との関係でその位置は変化していく（心理システムの考え方に類似している）。前者の新形成物の具体的な姿については、⑤を参照のこと。

③ここでの問題の焦点は、13歳の危機と移行期とのそれぞれにおける新形成物とは何か、ということである。ヴィゴツキーはこの問いに完全には答えてはいないが、その解明のための手がかりは与えている。

上述のように、「少年・少女の分裂的性質 схизотимный характер、つまり、分裂病〔統合失調症〕的気質 схизоидный темперамент と少年・少女の気質とのあいだの類似性」（1933/2001, c. 242, // 2012, p.121）が手がかりへの示唆であるが、精神における分裂という明らかに精神病理学の概念をそのまま使用するわけにはいかなかった。ヴィゴツキーは、ヘルバルトの心理学のなかに「分裂」の一般心理学的概念がある、と考えた。つまり、ヴィゴツキーはヘルバルトのなかに、「心理生活が説明され理解されるためには、全体としての意識の前

に、2つの基本的機能——すなわち、融合の機能と分裂の機能——がなければならぬ」（1933/2001, c.243, // 2012, p.122）という考えを読み取った。さらに、その後の精神病理学の諸概念、たとえば、フロイトの「圧縮 сгущение」「抑圧 вытеснение」「転移 перенесение」「隔離（分離）отщепление」のような用語の出自はヘルバルトにあると考えた（1933/2001, c.244, // 2012, p.123）<sup>17)</sup>。

ところで、ヴィゴツキーが精神病理学そのものについてと、その少年・少女期、13歳の危機との関連づけについて重きをおくのは、クレッチマーの学派と学説によるのであったが、そこでは、次のような考えが紹介されている。——「分裂はノーマルに組織された意識の機能であり、分裂は随意的注意にあたって同様に不可欠である。その場合、あるものに注意を払うときには、他の残りのものは注意の埒外におかれるのである。これと同じように、分裂は抽象化や概念形成にあたって不可欠であり、また同様に、精神病において観察されるような、精神生活の分裂にあたっても現れている」（1933/2001, c.245, // 2012, p.125）。重要なことは、「分裂」の概念が、定型的な（ノーマルな）発達（たとえば随意的注意、抽象化、概念形成）においても、精神病理学的な現象においても不可欠であること、つまり、これらと関連づけて捉えられている、ことであろう。

このような「分裂」概念と深くかかわってくるが、精神病理学的な「隔離（または分裂）」概念もかなり変化してきたようである。ヴィゴツキーがまとめるところによれば、そこでは分裂の存在というよりは、分裂の不十分さが語られるようになった。それは、通常は完全に分離されているものを融合させてしまうことによく現れており、たとえば、「個々の子ども時代の思い出と彼が本で読んだこと」とが結びつけられてしまう、という病的な現象が見られることがある（1933/2001, c.246, // 2012, p.125-126）。それなどは、不十分な分裂にもとづいた融合と言うべきであろう。

④少年・少女期のネガティブな相、つまり、13歳の危機の新形成物を、ヴィゴツキーはプロイラーの術語を用いて「意識における分裂機能の成熟」とあると特徴づけている（1933/2001, c.253, // 2012,

p.134)。

ここでの問題は、13歳の危機における「分裂機能」と少年・少女期という相対的安定期における「分裂機能」との相違をどのように捉えるかであろう。ヴィゴツキーは再びプロイラーに依拠しながら、前者においては、分裂機能に限らずこの時期のネガティブなモメントは、「移住状態にあり・まだ放浪していて・定住せず・人格に層をなすあれこれの性格特徴や特質や独自性に転化していないような、……分化・分界・個々の心的体験のグループの独特な孤立化」(1933/2001, c.250-251 // 2012, p.131)をあらわす、と考えた。短く言えば、この成熟しつつある分裂機能は、「新しい統一体にまだ引き入れられていない心的諸体験、一連の分化した・相対的に相互に隔離された・相互に区別された……心的諸体験」なのである(1933/2001, c.248 // 2012, p.128)。

この13歳の危機におけるネガティブなモメントの規定を敷衍すれば、少年・少女期という相対的安定期における分裂機能を理解することができる。こちらの分裂機能は新しい統一体にすでに引き入れられ然るべき位置を占めた機能である。それは、ヴィゴツキーが言うように、「将来の・形を整えた・分化し・統合された・人格構造」(1933/2001, c.253 // 2012, p.134)のなかに入り込んだ分裂機能(より正確には分裂機能と融合機能)ということになるであろう。それ故に、この機能は随意的注意が成立するために、また、抽象化と概念形成のためにも不可欠な機能なのであり(ここまでは分裂と融合を「区別と関連」とより論理的に特徴づけるのが好ましい)、ここから先はヴィゴツキーは明示的ではないが、ワロンの用語にもとづけば、人格構造を構成するのに欠かせない「自我」「第2の自我」(内的な第2の声)「その出自としての他者」が分裂と融合のなかに理解されることになるであろう。ここでは分裂と融合は新しい統一体のなかで自己が意識化されることによって、それらはより自由に活躍するのである。

⑤ 13歳の危機と少年・少女期のそれぞれの新形成物は複雑な形ではあるが、それでも発生的連関を構成している。これは、この時期だけの孤立的な現象ではなく、誕生から始まる人間の発達のスベ

てにおいて、同様な発生的連関が見られる。ヴィゴツキーはそれらを指摘することによって、いま考察している危機とその次の相対的安定期との関係を確固たるものにしようとしている。たとえば、次のように書かれている。

移行期のネガティブな相〔13歳の危機〕において扱われている分裂や危機は人格構造の不可欠の前提である、という観念は、どのように発生したのか。それ〔この危機〕は、自律言語の恒常的言語・真の言語への関係、3歳児の意志薄弱反応 *гипобулическая реакция* の、ルールにもとづく遊びのなかで発生する・現実的意志的行為への関係、と同じような、移行期の新形成物への関係のなかにある。3歳児は拒絶するが5歳児はルールに沿って行為する〔遊びのなかでは〕という事実、1歳児は自律言語で話す5歳児は文法的・統語論的構造を用いるという事実——これらの事実は相互に発生的連関のなかにある。ネガティブな相〔13歳の危機〕の時期における分裂、少年・少女の人格における発達の進行の分裂質的特色も、そのような連関のなかにある。人格の分裂がなければ将来の人格構造も発生しえないであろう(1933/2001, c.252-253 // 2012, p.133-134)<sup>18)</sup>。

ヴィゴツキーのこの文献の範囲内では、「将来の人格構造」、言いかえれば、移行期(少年・少女期)に本格的に発生する人格構造とはどのようなものかは、明示されていない。同時期に執筆された彼の児童学および精神病理学関連の文献をこまめに探索することが必要である。ヴィゴツキーの探究は、一方ではバフチンの描いた人格構造の次元には達しなかったが、他方では「発生的連関」という観点を仕上げつつあった。人格構造においてバフチンには及ばなかったがバフチンにないものがある。——これがヴィゴツキーである。

なお、バフチンの自己意識論・内的対話論に類似した自我論を提起した心理学者にはワロンがいる。ここでは、ワロンが3歳くらいの自己主張の時期から思春期・青年期における自他の明確な区別とそのもとでの自我形成〔いわば「第2の自我」の形成に至る発達〕について述べている点を、取り上げておこう(Wallon, H., 1946/1959, pp. 283 ~

//1983, pp.64 ~)。

### ①最初の意識状態と自他の形成

原初的な意識は、宇宙に発生する星雲に擬えることができる。外発的、内発的なさまざまな感覚運動的活動が、はっきりとした境界なしにばくぜんと拡散している。

やがて核 (= 自我)、その衛星としての「下位自我 *le sous-moi*」ができる。この下位自我は他者を出自としている〔自分の名前を呼ばれて振り向くという動作で応答するとき、自我の最初の核が認められるであろう〕。この自我と他者のあいだでの心的素材の配分は必ずしも一定ではない(個人によって、年齢によって)。精神生活上で何らかの選択を迫られたときの、自他の境界の変動がある。その境界が消え去ることもある<sup>19)</sup>。

### ②反抗的な危機

そのような自己と他者の「せめぎ合い」によって、子どものなかに「反抗的な危機」が生まれる。3歳の危機における反抗の特徴は「反抗のための反抗」であり、それまでは自分が好き勝手に行動できていたのに、ある権威、目上の人がこの独立性を奪い取ったと感じて、その権威と闘っている。〔参照。ヴィゴツキーの3歳の危機における「反抗」の捉え方：本当はやりたいことなのに、大人がそれをしてみたらといたので、それをしない〕。

この「せめぎ合い」は子どもの内面で起こっているのだが、現実の外的平面における自己と他者の「せめぎ合い」だという解釈もある。だが、現実の人と人との関係は、子どものなかでの「他者の幻想」(他者像)に媒介されている。この幻想の強度は様々に変動し、人と人との関係を規定している。この幻想の強度の変動そのものには様々な要因があり、それには、(内的要因としては)「自律神経系統の緊張度」「精神運動の活発さ」なども含まれている。

### ③第2の自我〔第2の主体〕と社会的自己

やがて、周囲の人々は私(主体)が自己を表現し、自己を実現していくきっかけ・動機となる存在となり、また私(主体)は周囲の人々に生命を与え自分の外に永続的に存在するものとしうる。これは、自我と、その不可分の補完者である他者と

の、明確な区別が打ち立てられたからである。この自他の区別は習慣的な区別を写し取ったものではなく、私(主体)のもっと深い内面で行われる「二項分類」の結果なのである。この場合の二項分類とは、その二項が対立するが故に相互に前提としているものであり、「自己との同一性」(いわゆる自己の主体性)を1つの項とすれば、他の項は同一性(主体性)を保持するために排除すべきものの縮約、言い換えれば内的な他者の縮約である。

こうした他の項としての「内的な他者の縮約」は、文脈によって、社会的自己 *socius*、主体(私)にたいする副主体 *l'alter* (*sujet*)、自我 *l'Ego* にたいする第2の自我 *l'Alter*、内なる他者 *l'autre intime* と呼ばれている。これらはすべて、意識の初期に登場した自我 *le moi* に対する下位自我 *le sous-moi* が形を整えてきたものであり、社会的自己 *socius*、主体(私)にたいする副主体、第2の自我、内なる他者は、他者を出自としながらも、自我〔自己、主体〕に従属したもの、あるいは、自我(自己、主体)の内部にあるもの、と解釈されているようである。

以上を振り返ってみると、ワロンの言う、副主体・第2の自我・内なる他者は、バフチンの言う「第2の内なる声」に照応し、それらの性格づけは、他者との関係——一方での「他者の縮約」、他方での「特殊な代用品」というように——相通じるものがある。ワロンが精神病理学的研究や子どもの発達研究にもとづいてこれらを述べたのは1946年、バフチンはすでに1929年に書いたのであるから、この面でのバフチンの先駆性は明らかであろう。

なお、ワロンの用いる二項分類 *bipartition* (1946 / 1959, p.284 //1983, p.66) は細胞分裂 *bipartition cellulaire* の分裂にも使われる語であるので、その語はヴィゴツキーの述べる分裂 *расщепление* の語と響きあっている。

## IV ヴィゴツキー理論による補完と発展

### オープンダイアログとヴィゴツキー

まずセイックラらがヴィゴツキーを論じているところを要約しておこう(セイックラ、トリムブ

ル、2015、pp.168-173)。

①対話主義はコミュニケーションの形式であるにとどまらず認識論的立場でもある。ここから、認識における一種の相対主義が生まれることになる。セックラらはバフチンをポスト・モダンの思想家と評価しているようだが、認識論における対話主義のゆえに、ポスト・モダニズムに真理を独占させるのではなく、モダニズム (modernist scientific discourse) にも有益性を認めている。そのなかに、ヴィゴツキーや彼と共鳴しあう発達心理学的諸研究が位置づけられている<sup>20)</sup>。

②ヴィゴツキーの発達心理学のアイデアは多くの点でバフチンの対話主義と響き合っている。もっとも根本的な原理としては、ヴィゴツキーは言語・思考・精神の起源を、個人内過程に内化していく間個人的出来事である (language, thought, and mind originate as interpersonal events that become internalized individual processes over the course of development.) と見なした。それは、自己中心的言語と内言との関係や、多声的な声の内化としての内言の基礎の形成にも、見事に現れている。

③内言は行為や感情状態をコントロールする強力な道具となるが、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」のアイデアは、治療的ミーティングにおける感情の流れのサポートを理解することに資する (おそらく治療チームによるリフレクティングはそのように位置づけられるであろう)。

④現代の発達心理学研究は、人間の脳・身体の構造のなかに子どもの初期経験に起源をもつ対話の基礎的・形成的・過程が含まれていること (in the development of the structure of human brain and body, dialogue is a fundamental formative process originating in the first months of life.) を明らかにしてきた。たとえば、親と子どもとの環境は、感情状態の相互コントロール、対象の世界への注意の相互の方向づけ、さらには、記号への相互の注意、最後には、言語の相互の理解、への発達をもたらすが、子どもはそのような環境を切り拓くのである。これらも、ヴィゴツキーのアイデアと共鳴しあっている。

以上の要約 (齋藤環『オープンダイアローグと

は何か』医学書院、2015年、p.170-171 参照) からでも、バフチン理論と並んでヴィゴツキー理論も、オープンダイアローグの理論的基礎をなしていることが、よくわかる。

#### リフレクティングとしての発達の最近接領域

セックラらは、オープンダイアローグの一部分となっている「リフレクティング」(当事者とその家族の眼前で行われる専門家同士の話し合い) をヴィゴツキーの言う「発達の最近接領域」の創造と比している。

ところで「発達の最近接領域」とは、もともとは、ヴィゴツキーが知的教育のプロセスのなかにいる子どもの知的発達の動態を表す概念である。それを要約すれば、子どもはたえず、二重の知的発達水準を持っている。一つの水準は、子どもが独力で課題を解決しうる水準。もう一つの水準は、独力では解決できないが、先生がヒントを与えたり、年上の子どもと一緒にすれば課題解決できる、という協同的水準である。この二つの水準の隔たりのことを、ヴィゴツキーは「発達の最近接領域」と呼んだのである。子どもの持つ「発達の最近接領域」のなかに位置する課題を提供することこそ教育的である。協同的水準があつてこそ、独力の水準が向上するのである。

セックラらは、オープンダイアローグにおける「リフレクティング」は、発達の最近接領域の創造に類似している、と考えたのであろう。少なくとも、リフレクティングによってダイアローグの水準が向上することを期待したのである。

#### ヴィゴツキー理論によってさらに補完可能なこと——知と情の関連

以上のように、情動のコントロールと内言との関連、リフレクティングと発達の最近接領域との関連が、オープンダイアローグにヴィゴツキー理論が寄与するものとして、理解しやすいのであるが、ヴィゴツキー理論に対する視野をやや広げてみると、さらに補完可能なものが見出される。

セックラらは、ヴィゴツキーの内言理論や発達の最近接領域のアイデアを取り上げるとき、もっぱら情動および情動のコントロールという視

点からそれらを重要視している。そのことは確かに治療的対話においてまずは必要なことであろうが、翻って捉えてみると、ヴィゴツキーが情動の問題を考察するときには、情動の先にまで、つまり、知と情の関連にまで進んでいる。そこまで行っても、情動が理解できる、というのが、ヴィゴツキーの観点である。その観点から補完可能な点をあげてみよう。

①知と情の関連についてのヴィゴツキーの考察は多岐にわたるが、彼が提起した主要な諸命題は、横軸と縦軸とに、システムの観点と因果関係もしくは歴史の観点とに分けて整理することができるであろう。

横軸の観点は、心理システム理論である。心理システムとは、どの心理機能を考察する場合にも、それを個別的に捉えるのではなく、他の心理諸機能との関連のなかにおいてとらえてこそ、その心理機能の本質が顕わになる、という考え方である。ヴィゴツキーはこの考え方を「心理システムについて」1930年(Выготский, Л. С., 1930 / 1982 // 2008)のなかで初めて提起し、彼の死(1934年)に至るまで、それを深化させた。おそらく心理システムの観点から書いた最後の論文は「知的遅滞について」1935年(Выготский, Л. С., 1935 / 1983 // 1982 // 2006)であろう。その論文は、次のように述べている。

精神薄弱児と健常児の比較研究が示しているように、両者の相違は、なによりも、知能そのものの特質または情動そのものの特質のなかよりは、心理生活のこれらの領域のあいだにある諸関係の独自性、感情的過程と知的過程との関係が切り拓く発達の道程の独自性のなかに見出されねばならない。思考は情念の奴隷や下僕であることもできるし、情念の主人であることもできる。明らかなことであるが、感情的諸機能と直接に結びついている脳のシステムは、きわめて独特な形に配置されている。感情的諸機能は、脳を開通させ連結し、もっとも低次で古代的な脳の第一次システム、および、もっとも高次で後期の、人間に固有な脳の形成物として現われている。もっとも原始的な形態からもっとも複雑な形態までの、子どもの感情生活の発達の研究は、低次の感情的形成物の高次のそれへの移行が感情と知能とのあいだの諸関係の変

化と直接に結びついていることを、示している(1935 / 1983, c.255 // 1982 // 2006, p.133)。

この一文には、関連しあった3つのテーゼが含まれている。第1のテーゼは心理学の次元における心理システム理論である。知的障害のある子どもを捉えるとき、健常児との比較で、その子どもの情動の特質あるいは知能の特質を探り出そうとしても、知的障害の本質には迫ることができない。問題は、知にあるのか、それとも、情にあるのか、という点にはなく、むしろ、知と情との関連のなかにある。これが心理システム理論の観点である<sup>21)</sup>。第2のテーゼは、哲学の次元における心理システム理論である。「情動の奴隷」も「情動の主人」も、ともにスピノザのことばである。ヴィゴツキーは、スピノザ感情論の見地から神経学を考察することも、その逆に、神経学の見地からスピノザ感情論を考察することも可能であると述べる(1933 / 1984, c.101 // 2006, p.18)ように、スピノザ情動論を格別に重視した。そこから次のテーゼが生まれてくるのは自然なことであった。第3のテーゼは、すでに、次の因果関係のもしくは歴史的観点についてである。

②縦軸の観点、因果関係のもしくは歴史的観点は、心理神経学理論によるものである。ヴィゴツキーは、この観点を、もっとも古くはジャクソンから、精神病理学に関してはクレッチマーから、情動についてはキャノン＝バード理論から引き出している。その起点はジャクソンにあり、それについてヴィゴツキーは次のように述べる。

ジャクソンによれば、神経系の組織は高次中枢と低次中枢の複雑なヒエラルヒーであり、そこでは、高次中枢のより分化し繊細な形態の活動を何度も乱すことのできるような脳の古い部分の原始的・古代的諸機能は、高次中枢の側からの抑制的影響を受けているが、それ故に、ノーマルな条件のもとでは能動性を自由に発揮して行動において支配的な役割を演じることはできないのである。あれこれの条件のために低次中枢に対する皮質的コントロールが弱まるか、まったく消失するときに、以前には従属クラスであった低次中枢が自立的になり、自由に作用するようになるが、そのために低次中枢の非随意的で極度に

集中的な能動性が現れることになる。きわめて弱い刺激でも、こうした条件のもとでは、極度に過剰な反応をひき起こしうるのである（1933 / 1984, c.147 // 2006, p. 93）。

要約すれば、人間の神経系組織は高次中枢（大脳皮質における）と低次中枢との複雑な階層として構成され、ノーマルな状態では、低次中枢は高次中枢のコントロール下にある。ところが、何らかの事情で、高次中枢によるコントロールが弱化または消失したときには、従属クラスである低次中枢が「非随意的で極度に集中的な能動性」を発現させ、極めて弱い刺激によっても「極度に過剰な反応」を惹き起こす。ヴィゴツキーはクレッチマーからも同様の命題を、たとえば統合失調症において、導き出し（Выготский, 1931 / 1984 // 2004）、情動については、キャノン＝バード理論によりながら、大脳皮質の高次中枢、皮質下中枢、末梢神経の3つの連関を考慮に入れることによって、情動の豊かな現れ方を神経学的に説明できる、と考えた（Выготский, 1933 / 1984 // 2006）。スピノザの情動に関する諸テーゼ——コナトゥス（自己保存の本能）と情動の発生、高次の情動による低次の情動への抑制とその逆、情動の認識による情動の制御とその逆、等々——もまた、同じく神経学的に説明しようと、ヴィゴツキーは考えたと推察することができる。上述のスピノザ感情論と神経学との相互関係が教えているのはこのことであろう。

③統合失調症は、知と情に関する横軸と縦軸を交差させることによって、より全面的に理解しうるようになる。

統合失調症は、斎藤環が述べるように、「自分と他者の境界があいまいになる病気」（斎藤、2015、p.13）であり、ヴィゴツキーは発達心理学的見地から「概念の崩壊」「概念的思考の崩壊」をその本質的特徴と考えた（1931 / 1984 // 2004）。これを縦軸の観点から解釈してみよう。3歳代の「自我の芽生え」における自他の形成の始まりが13歳の危機を超えたところで認められる自他の境界の意識化（自己意識の形成）において一つの画期を迎えると考えると、その10年間に生じているのは意識の誕生から自己意識の誕生への過程である。これをヘーゲル的に捉えてみると、悟性（常識的な知）か

ら自己意識の形成を経て理性（新しい創造的な知）へという知の運動になる。それに照応する形での、複合的思考から自己意識を経て高次の概念的思考へという知的発達を理論づけようとしたヴィゴツキーは、「発達は、病理学的諸過程、総合や高次の統一体の崩壊の諸過程を理解する鍵であり、病理学は、発達の歴史、高次の総合された諸機能の構成を理解する鍵である」（1931, c.400 / 1984 // 2004, p. 214）と述べ、発達は統合失調症の理解への鍵であるとともに統合失調症は発達の理解への鍵であると考えた。こうして、発達と後退（逆発達）の双方を一つの図式によって、言い換えれば、縦軸の観点によって理解しうることを提起したのである。

統合失調症を理解するための横軸もまた、縦軸と密接に関連づけつつ、ヴィゴツキーは解明しようとした。当時の統合失調症の研究者シュトルフを引用しつつ、対象的意識の異常性と自我の意識における恒常性の喪失とが並行的に生じると、ヴィゴツキーは考えている。——「私たちが対象的意識の領域で示しえたように、統合失調症患者における対象的意識の異常性は、発達した人間の場合の世界の構図に分化・定式・一定の構造を付与する恒常的諸要素が喪失していることにもとづいているのだが、それと同じように、自我の意識においても恒常性の同様の喪失が平行的現象として明らかにされた。また、第1の場合に未分化で直観的な複合的諸性質が、定式化された諸事物や、従属的な心的体験の諸グループ、確固たる諸概念の世界に取って代わっているのと同じように、後者の場合には自我の完成した意識の位置を、部分的諸成分の複合的併存や、自我の境界の撤廃が占めるようになり、その故に、他の諸個人との拡散的融合や融即が可能となるのである」。このシュトルフのことばに次のモメントを付け加えて、ヴィゴツキーは統合失調症の核心を締めくくっている。すなわち、「そのモメントとは、現実の意識・世界の構図の心的体験・人格の自己意識・の分裂の基礎にあるのは概念形成の機能の破壊である、という点にある」と（1931, c.430 / 1984 // 2004, pp. 251-2）。ここにおいて、横軸の観点と縦軸の観点とが統一されるのである。

## 「モノログ」と袋小路

セックラらは、バフチンの言うモノログに学びつつ、治療的対話における「モノログ」を「袋小路」と特徴づけている（セックラ、トリムブル、2015、p.171）。治療的対話の領域では、確かにモノログでは袋小路から抜け出せない、と理解しうる。

ところで哲学的対話となると、モノログにはそれとは異なる位置づけが必要であろう。ヤクビンスキーの考える・高次元の心理過程をもたらす・「書記言語」はモノログと親和性があるし、ヴィゴツキーの場合には、発生的に見れば、モノログは内言の前史でもある。その場合、ダイアログの形での応答としての外言が哲学的であればあるほど、そのなかに必要とされるものは内言である。

このあたりは個の次元の発生的な見方の有無によるヴィゴツキーとバフチンの相違として明確に捉えておく必要があるであろう<sup>22)</sup>。

おわりに——対話の「非完結性」の意味するもの

小論はオープンダイアログの理論的基礎に光を当てるために、Iで指摘した4つの問題を考察しようとした。それは、①ヤクビンスキーの対話論の評価、②バフチンがドストエフスキーの小説のなかに解明した対話構造（その核心は自己意識と内的対話、他者との対話）、③ヴィゴツキーの発達の最近接領域、内言、統合失調症における概念の崩壊（人間発達の地層理論・心理システム論の一環としての）、④オープンダイアログの最深部にあるポストモダニズム・モダニズムの関係、であった。

そのうち、②から流れ出てくる「ソクラテス的対話」については、取り上げることができなかった。もちろん、バフチンは「ソクラテス的対話」を、ドストエフスキーのポリフォニー小説の母胎となるカーニバル文学（典型的にはラブレール）の最初の現れと位置づけ、真理は人の内部ではなく人々のあいだに（対話のなかに）あること、対話の方法としてのシンクリシスとアナクリシス、広義の文学のなかに初めて登場したイデオログのあいだの対話、等々と貴重な論点を提起している。しかし、哲学者同士の対話とそれとは相対的に区別されるより広い「哲学的」対話とを関連づけるためには、

ソクラテスに関するバフチンの言説だけでは不足するので、それは今後の課題に残した。

また、④のポストモダニズムとモダニズムとの関係の問題はオープンダイアログの最深部に潜んでいると考えられるが、その十全な解明も他日を期すほかはなかった。

とはいえ、小論の最後に、若干指摘しておきたいのは、セックラらが述べるオープンダイアログにおける「不確実性への耐性 Tolerance of uncertainty」、バフチンの言う対話の「非完結性 незавершимость」についてである。キーワードにも掲げたこれらの概念は、ポストモダニズムとモダニズムとの関係の問題にもっとも接近している。

この問題を考察しようとするとき、先に脚註で述べたバフチンの考え——すなわち、相対主義と教条主義は対話を不必要にするか不可能にするかである——に続けて、彼は「芸術的方法としてのポリフォニー」つまり対話主義「は、概して他の平面のなかにある」と対話を位置づけるのである（Бахтин, М. М., 1963/2002, глава II, с.81 // 1995, p.142）。

相対主義も教条主義も、必要性か可能性かの動機の違いはあるけれども、どちらも対話を始めさせない。それらとは異なる平面にある対話主義は対話が始められたら完結ということを知らない。言い換えれば、内的対話もその外的対話との相互関係も無限に続くことになる。対話は結論を求めるための手段ではなく、対話そのものが目的となる。バフチンはドストエフスキーの諸作品のうちに対話のタイプの違いを考慮しながらも、どの対話にも同じ構成原理を見出している。それは、次のようなことである。——ドストエフスキーの作品におけるどの対話においても、「公然たる対話の応答の、作中人物たちの内的対話の応答との、交錯・共鳴・途切れ」があり、どの対話においても「観念・思惟・言葉の一定の総体が、いくつかの融和しない声、各々の異なる響きに沿って、実現されていく」（Бахтин, М. М., 1963 / 2002, с.296 // 1995, pp.558-559）。

これは、治療的、哲学的、その他の実際の対話においても貫かれるものであり、その場合、対話のなかで得られた「観念・思惟・言葉」はときには

新しいものであるが、遅かれ早かれ、それらはその地点に留まらず、無限に続く対話のなかで、より新しいものへと形成されつづけるのである。「いくつかの融和しない声」「各々の異なる響き」こそ対話を続ける動機となる。

それは語の意味の無限の拡がりに近い（ヴィゴツキー、ポラン、2019、p.49）<sup>23)</sup>。そこでは、語の意味を定着させようとする「語義」の働きと、もっとも典型的には個人のなかで生き「語義」を狭めたり「語義」に新しいモメントを与えたりする「意味」の働きとの、複雑な連関がある。対話は、意味論の次元において捉えると、こうした「語義」と「意味」とのせめぎ合いを容易にする。もちろん、ヤクビンスキーによる区分を援用すれば、ことばの自動化を産み出す対話と高次元の心理過程をもたらす対話とでは、せめぎ合いの現れ方は明らかに相違があるが、どちらにもせめぎ合いがある、という点では相違がない。

対話のなかで明瞭になるのは、このような「語義」と「意味」の関係だけではない。ヴィゴツキーの位置づけにおける記述心理学と因果心理学、バフチンによる人間理解における人間の概念的理解（たとえば物象化論）と形象的理解（さらには声の理解）、人間理解における物語性と法則性、ポスト・モダニズムとモダニズム、「相対的なもの」と「絶対的なもの」——これらの各二項はけっして二者択一を迫っているのではない。対話のなかでは、各二項はせめぎ合い、「敵対」することもあれば「和解」することもあるが、一方が他方に打ち勝つことはない。終わることを知らない対話のなかで、各二項は統合というものに無限に接近する。これこそが対話の「非完結性」の真の意味であろう。

## 注

- 1) オープンダイアログの手短な紹介としては、<https://medical.jiji.com/topics/322?page=1> が参考になる。
- 2) 斎藤環が中心になって組織しているオープンダイアログ・ネットワーク・ジャパンの設立に寄せた、保坂展人 世田谷区長のメッセージ（2016年7月12日）は、このダイアログが持つ精神療法を超えた性格をうまく表している（<https://www.opendialogue.jp/> より引用）。——この度は、オープンダイアログネットワークジャパンの設立おめでとうございます。この会は、オープンダイアログの日本展開を目的に斎藤環先生をはじめ関係者の方々のご尽力により活動が開始しました。
- 3) 私は、斎藤環先生の著書である「オープンダイアログと何か」を拝読し、とても驚きました。そこに書かれていることは、治療が難しい統合失調症の患者が家族とともに専門家チームとの対話を重ねることで、危機的状況を抜け出て快方に向かうというのです。5月にフィンランドからヤッコ・セイックラ氏とトム・アンキル氏を迎え、オープンダイアログワークショップが開催されました。ワークショップは3日間に渡り実施され、医療従事者等の専門職をはじめ全国からの参加がありました。私も2日目のワークショップと交流会に参加させていただきましたが、皆さん大変活発に議論し反響があったと感じております。「対話」によって相互理解を深め、「違い」を叩き合うのではなく「重視」する接点を求め、「結論」「方針」を急ぐのではなく、当事者と一緒に時間をかけて生まれてくる信頼を醸成する。そんなオープンダイアログの理念と思想、そして手法は精神医療に止まらない「魔法の鍵」を示唆しているように感じます。
- 4) オープンダイアログの取り組みが多くの方に認知され、広まっていくことを望んでおります。
- 5) 3) 詳述は避けるが、ヴィゴツキーのこのような指摘を理解するためには、彼が唱えた、知と情の連関などを鋭く解明しようとしたスピノザやスタニスラフスキーの理論的伝統に立つ「心理システム論」と脳の諸機能の階層的諸関係を研究したジョン・ヒューリング・ジャクソンの神経学的伝統にもとづく「人間発達の地層理論」との理解が必要であろう。
- 6) バフチンは「私の著作〔1929年の『ドストエフスキーの創作の問題』〕のあと（だが、この本とは無関係に）、ポリフォニー・対話・非完結性 незавершимость の思想が広範に発達してきた」と述べている（1961/1979、c.309）。
- 7) ヴィゴツキー理論と発達心理学とをオープンダイアログに採り入れる場合、セイックラらはダイアログを、したがってバフチン理論をポスト・モダニズムの視点のみならずモダニズムの観点からも把握すべきであろう、と考えている。
- 8) ソクラテスの対話への連結を論じる準備は整わなかった。上記のように、バフチンは、カーニバル文学というジャンルのなかにソクラテスの対話を位置づけ、哲学が文学からまだ未分離な状態と特徴づけた（1963/2002、c.124-127 // 1995、pp.226-231）。オープンダイアログを哲学的対話につなげていく緒口になるであろう。
- 9) 「思惟から語への」「内言から外言への」運動、とりわけ、その「途切れ」は対話について理解する上で、特に、何らかの知的・精神的障害を持つ人たちの対話や創造的対話にとって重要であろう。この点については、拙論「言

葉の内と外」(ヴィゴツキー、ポラン、2019年所収)を参照されたい。

- 8) 小論では問題の指摘にとどめ、その詳論は後日、別に行いたいと思う。
- 9) ヴィゴツキーの規定する内言は、ことばの機能の観点からは、他者に語ることばとしての外言に対して自己に向けたことばである点で、外言から相対的に独立したことばであり(自己に向かうということから高次心理諸機能を担うことになる)、同時に、ことばの構造の観点からすれば、外言と同じように、形相的側面と意味的側面の統一体であり、内言はたんに意味の担い手なのではない。
- 10) 往復書簡も書記的形式の対話である。また、わが国の事例をあげれば、短歌における相聞歌、俳句における連句もそのような対話である。
- 11) この点について、ヤクビンスキーは次のように書いている——「私たちは本能的にお互いを見ながら話している。子どもは、しゃべって返答を待つとき、手で母親の顔の向きを変える。まさしく、会話するときにお互いを見ようとするこの本能的志向は、こうして、理解のあらゆる可能性を用いるのに役立つようになったし、私が思うには、懇談のための場所である客間で誰かに背を向けて座るのは『無作法』であるとする習慣の原因の一つであろう。「表情と身ぶりは、会話において無関係で・付随的で・偶然な・ものではないし、その逆に、会話と結びついて一つになるものである。話し相手の視覚が存在しない・電話での対話においてさえ、表情と身ぶりはしばしば実行されている。」(第19節、p.23)。
- 12) ヴィゴツキーはヤクビンスキーが論じる対話と独話、ことばの口頭形式と書記形式の諸関係を念頭において、書きことばと内言との関連を次のように書いている。——「書きことばは、複雑な活動の次元において、ことばの流れを促進する。ここでは、ことばの活動は複雑な活動として規定される。このことをもとにしているのは、草稿の利用である。『下書き』から『清書』への道は、複雑な活動の道である。ところで、実際の草稿がない場合でも、書きことばにおける考えの整理のモメントはきわめて強力である。私たちは、まったく頻繁に、まず自己のなかで語り、それから書いている。ここには、思考における草稿がある。そうした書きことばの思考における草稿は、私たちがこれまでに指摘しようとしたように、内言なのである。」ヴィゴツキー、1934/1999, c.317//2019, pp.116-117。
- 13) 上記に考察したように、対話形式か独話形式か、直接的交通性か間接的交通性か、という4種類の特徴の組み合わせだけでは、対話のことばの問題を十全に考察したことにはならないのは、「独話形式と直接的形式の結びつき」が同時に「対話形式と間接的形式の結びつき」となるという混合的状态の分析から明らかであろう。そこでは、相対的に独立したことばとしての「話しことば」「書きことば」、さらに根本的には「外言」「内言」という、ヤクビンスキーにとって新しい概念が必要となる。つまり、対話のことばの十全な考察には、ヴィゴツキーが必要なのである。
- 14) もう少し厳密に言えば、「詩学」「対話」「ポリフォニー」の用語から一義的にヴィゴツキーを導き出すには無理があるが(間接的、媒介的には可能であろう)、セイツクラらが使用するリフレクティングという用語(その内容からすれば、対話についての〔専門家による〕対話、その公開。いわば〔専門家による〕メタ対話の外在化)からは、後述するように、ヴィゴツキー理論を導き出すことができる。セイツクラら自身のことばを考察すれば、ヴィゴツキー理論と一義的に関連づけて捉えられるのは、「行動や感情を制御するための強力な道具」となる「内言」、リフレクティングなどを念頭におきながら規定される、「ミーティングにおける感情の流れ」をサポートするものとしての「発達最近接領域」(セイツクラ、トリムブル、2015、p.169)であろう。
- 15) バフチンは「私の著作〔1929年の『ドストエフスキーの創作の問題』〕のあと(だが、この本とは無関係に)、ポリフォニー・対話・非完結性の思想が広範に発達してきた」と述べている(1961/1979, c.309)。
- 16) たとえば、論文「行動心理学の問題としての意識」(1925年)では、人間によって作り出された刺激への反射、つまり、語・ことばへの反射について論じながら、「ここに、他者の『自我』についての問題・他者の心理の認識についての問題・の根源がある。自己の認識のメカニズム(自己意識)と他者の認識のメカニズムは、同一である」(1925/1982, c.95-6)と述べられている。
- 17) ヴィゴツキーはより詳しく次のように述べている——「フロイトは、分裂に関するヘルバルトの学説を『隔離(分離) отщепление』の名のもとに復活させて、観念のあるグループをコンプレックスと呼んだ。このグループは、一定の感情と結びついているが、意識の一般的な塊りから隔離され、それ故に、無意識となり、意識と生命のある身体との他のシステムと——異種の身体のように——交わらないのである」(1933/2001, c.244, // 2012, p.123)。
- 18) 「自律言語」は1歳代の子どもに典型的に見られる、通常の意味範囲を遥かに超えていく意味の変動や語形の変動を示している。「意志薄弱反応」は3歳児に典型的に見られるもので、「本当はしたいことなのに、大人からそれをしなさいと言われたのでしない」というような、感情によって意志が弱められる現象を示している。
- 19) ワロンは自我が誕生してから他者が現れてくるのか、他

者が現れるから自我が誕生するのか、という発想はとらずに、「意識による・自我の生成と他者の生成とは、並行して行われる」(Wallon, H., 1956/1963, p.90 //1983, p.31) と考えた。

- 20) 精神療法の見地から、パフチンをポスト・モダニズムのなかに位置づけることは理解できるが、パフチンの思想そのものをそのように捉えて良いかどうかは慎重な検討が要るであろう。たとえば、ポスト・モダニズムと親和性の高いと考えられる相対主義について、パフチン自身は次のように対話を不必要にすると批判的に考えているからである。「相対主義 релятивизм も教条主義も、あらゆる口論、あらゆる真の対話を排除してしまう、——この対話を不必要にするか (相対主義)、不可能にするか (教条主義)、によって」(Бахтин, М. М., 1963/2002, глава II, с.81 // 1995, p.142)。
- 21) 心理システムのわかりやすい事例は、スタニスラフスキーの演技論における情動・表象の関連に対するヴィゴツキーの考察に現れている。スタニスラフスキーは俳優に対して、演技がリアルで役に生きることが可能になるためには、役の感情に類似した自分自身の感情を呼び起こさねばならない、と言う。だが同時に、感情には命令する (たとえば、ある感情に「生起せよ」と命じる) ことはできず、その感情を抱いたことのある現実場面を想起し表象することによって感情を誘き出す他はないのだ、と言う。ヴィゴツキーはこのようなことが可能になるのは、表象と情動とがシステムを構成しているからである、と解説している (Выготский, Л. С., 1932 / 1936 / 1984)。知と情の心理システムに関するひとつの好例であろう。
- 22) なお、ヴィゴツキーの発達論からは対話の成立にセンシティブな時期を導き出すことができる。それには教授・学習の3様式と対話の事実などの諸媒介を経る必要があり、小論では省略した。拙稿「対話的關係と発達の問題」2019を参照のこと。
- 23) ボランが提起しヴィゴツキーがそれを肯定した語の意味の無限性について、「地球の意味については、それを完全なものにするのは太陽系であり、太陽系の意味については、銀河の全体が疑いもなく私たちにそれをよりよく理解させ、銀河の意味については……。つまり、私たちは、何についても、したがっていかなる語についても、その完全な意味を決して知り尽くすことがないのである。語は新しい問題の汲み尽くせない源泉である」と述べられている。

## 文献

- Бахтин, М. М. (1929/2000//2013), Проблемы творчества Достоевского. / То же, Собрание сочинений в семи томах, т.2, М. Русские словари. // Достоевскийの創作の問題、桑野隆訳、平凡社ライブラリー。
- Бахтин, М. М. (1961/1979), К переработке книги о Достоевском, в кни.: М. М. Бахтин, Эстетика словесного творчества, 1979, М., Искусство, с.308-327. [パフチン、ドストエフスキーに関する著作の改編によせて]
- Бахтин, М. М. (1963/2002//1995), Проблемы поэтики Достоевского. / То же, Собрание сочинений в семи томах, т.6, М. Русские словари. // Достоевскийの詩学、望月哲男・鈴木淳一訳、ちくま学芸文庫。
- 神谷栄司 (2019) 対話的關係と発達の問題、子どもの発達・権利研究所報第2報 [花園大学学術リポジトリにてウェブ上で閲覧可能]。
- 齋藤環 (2015)、オープンダイアローグとは何か、齋藤環他：オープンダイアローグとは何か、医学書院。
- セイヤクラ、トリムブル (2015)、治療的な会話においては何が癒やす要素となるのだろうか、齋藤環他：オープンダイアローグとは何か、医学書院、2015、pp.149-181。
- Выготский, Л. С. (1925 / 1982), Сознание как проблема психологии поведения / Выготский Л. С., Собрание сочинений, т.1, М., Педагогика [ヴィゴツキー、行動心理学の問題としての意識]
- Выготский, Л. С. (1930 / 1982 // 2008), О психологических системах / Выготский, Л. С., Собрание сочинений, т.1, М., Педагогика // ヴィゴツキー心理学論集、柴田義松・宮坂瑠子訳、学文社。[ヴィゴツキー、心理システムについて]
- Выготский, Л. С. (1932 / 1936 / 1984), К вопросу о психологии творчества актера / в кн.: П. М. Якобсон, Психология сценических чувств актера, М., 1936 / Л. С. Выготский Собрание сочинений, т.6, М., Педагогика, 1984. [ヴィゴツキー、俳優の創造心理学の問題によせて]
- Выготский, Л. С. (1933 / 1984 // 2006), Учение об эмоциях. Историко-психологическое исследование / Выготский, Л. С., Собрание сочинений, т.6, М., Педагогика // 情動の理論—心身をめぐるデカルト、スピノザとの対話、神谷栄司・土井捷三・伊藤美和子・竹内伸宜・西本有逸訳、三学出版 [ヴィゴツキー、情動に関する学説]
- Выготский, Л. С. (1933/2001//2012), Негативная фаза переходного возраста, Лекции по педологии, Издательский дом «Удмуртский университет», // ヴィゴツキー、「人格発達」の理論—子どもの具体心理学、土井捷三・神谷栄司監訳、三学出版。
- ヴィゴツキー (1934/1999//2019) Мысль и слово / Мышление и речь, Глава 7, Лабиринт, М. // ヴィゴツキー、ボラン、言葉の内と外—パロールと内言の意味論、三学出版。
- Выготский, Л. С. (1935 / 1983 // 1982 // 2006), Проблема умственной отсталости / Выготский Л. С., Собрание

сочинений, т.5, М., Педагогика // ヴィゴツキー障害児発達論集、大井清吉・菅田洋一郎監訳、ぶどう社 // 障害児発達・教育論集、柴田義松・宮坂瑋子訳、新読書社。〔ヴィゴツキー、知的遅滞の問題〕

ヴィゴツキー、ボラン (2019) 言葉の内と外——パロールと内言の意味論、神谷栄司(編・訳・著述)、小川雅美訳、伊藤美和子訳、三学出版。

Wallon, Henri (1946/1959//1983). Le rôle de l'autre dans la conscience du moi. Journal Egyptien de Psychologie, Vol. 2, 1946, n° 1 / In: Enfance, tome 12, n° 3-4, 1959. Psychologie et Éducation de l'Enfance. pp. 277-286 // 「自

我」意識のなかで「他者」はどういう役割をはたしているか、ワロン/身体・自我・社会、浜田寿美男訳・著、ミネルヴァ書房。

Wallon, Henri (1956/1963//1983) Niveaux et fluctuations du moi. « L'Evolution psychiatrique » I / In: Enfance, tome 16, n° 1-2 // 自我の水準とその変動、ワロン/身体・自我・社会、浜田寿美男訳・著、ミネルヴァ書房。

Якубинский, Л.П. (1923//2019), О диалогической речи / 田島充士編、ダイアローグのことばとモノローグのことば、福村出版、pp.2-79。〔ヤクビンスキー、対話のことばについて〕

